悲しいひと

雛子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲しいひと

【Ｎコード】
Ｎ０７３２Ｋ

【作者名】
雛子

【あらすじ】
その時、私は泣くのだろうか

れんげ

走るたびに、ランドセルががちゃがちゃする
誰よりも早く教室をでた
校門にむかって走る耳元で
いつもの声がする
その声のことは誰にも言いたくない
そして
これから行くところは、誰にも知られたくない

校門の前に立つ
私を待つ人影をわざと通り過ぎ
追いかけて来る音に
振り返らずに叫ぶ
「早くしてよ！」
私はとてもいじわるだった

走る先は自宅とは反対方向
「どうして家に帰らないの？」
聞かれるのがいやだから
とにかく走る

坂の上で自転車を押さえながら待つ伯母の
姿が見えたところで
走るのをやめた
まもなく追いついてきた弟に
「遅い」
と言いながら歩き出す

「早かったわねぇ」
自転車を押しながら歩く伯母の後ろを
ゆっくり付いていく
「何が食べたい？」
「別に」
「お父さん、早く退院するといいわね」

父が会社で倒れたのは1週間前だった
会社近くの病院に入った父のところへ
母は毎日行っている
私と弟は、隣町に住む
伯母のところから
学校に通っていた

「お父さん、何の病気？」
弟が伯母に聞いている
「胃潰瘍」
「ふうん」

たいしたことではない
お父さんが病気だって
恥ずかしい事じゃないし
もうすぐ、退院してくるんだから

でも
どうして
こんなに不安になるのだろう
世の中から
普通じゃないと
平均以下だと

思われているような
そんな気がする

その日はいとこの誕生日だった
伯母の家の近くでれんげの花を摘んだ
花束はふたつ
ひとつはいとこに
もうひとつは父に

夜遅く
父の見舞いから帰って
伯母の家に様子を見にきた母が言う
「今日、由香ちゃんの誕生日に、花束あげたんだって？」
「うん」
「お父さんにはないの？あなたには、そういう気持ちがないのよ」

父への花束は、川に流してしまった
持って行って、と、どうしても言えなくて
迷って迷って
川に流した
（お父さんが早くよくなりますように）
何度も祈った

でも
言わない

言ったら
泣きそうだから

彼

「俺のボールペン知らない？」
中学２年の春
彼は私の隣の席にいた

「知らない」
彼は、私のペンケースを指す
開けると彼のボールペン

驚く私を見て、大喜びする彼がいる

次の時間
私は彼に訊ねる
「私のシャーペンとボールペンと
消しゴム知らない？」
「知ってる」
「どこにあるの？」
得意げに彼が自分のペンケースを開く

そんなところに入れるはずないし

「本当に知ってるの？」
「知ってる」
自信たっぷりに自分の鞄を探る彼

そんなに私は甘くない

「やっぱり、知らなかった」
と、彼が言う
私は笑って、彼の制服のポケットを指した
次の日
体操着姿の彼が私をつつく
「俺の制服知らない？」
私は、自分の机と鞄を目で探りながら答える
「知らない」
彼はあっさり教室を出て行く
変な人
教科書を置きに行った
ロッカーの前で
私はすわりこんで笑った
彼の制服が詰め込まれていたから
リップクリームを色つきに変えただけで
街中が私の唇を見ている気がした
そんな頃に
私は、彼が一番好きだった
彼が風邪で休んだ日、その1日の長さ
次の日、彼が教室に入って来たときの胸の痛さ
それは
今でも

私をあの頃に連れて行く

彼を思い出すとき
２つの顔が浮かぶ
笑顔と
寂しそうで悲しそうな横顔

彼の横顔は
私を落ち着かせた
周りの誰にもない深い瞳が
私を安心させる

何かを隠している瞳

「死ぬなよ」
秋の午後
太陽のぬるま湯が窓に残る教室で
彼が言った

私は笑う
それが
「あいしてる」
に
聞こえたから

彼の両親が離婚していることを知ったのは
その言葉から
少し後だった

誰よりも良く笑う彼が

誰よりも人を笑わせる彼が
誰よりも大人びた表情を見せる意味

学校へ向かう時
帰る時
私は彼と彼の心を思う

悲しいのかしら
寂しいのかしら
それとも

彼の笑顔を思い出す
どうして
彼は笑うんだろう

強いのかしら
弱いのかしら

私は
強い？
弱い？

悲しい？

そして
ついこの間
終わったばかりの夏に
身震いする

真っ赤に焼けた線路のある

小さな町のことを
誰かに話すとき
私は泣くのだろうか

記憶

押し付けられるような暑さだった
車から飛び降りた私は
川に向かって走り出した

やけどしそうな程
真っ赤にやけたレールの上を
飛び越えて
甘い想いの立ちこめる川を見下ろす

父の故郷は
四方を山に囲まれた町
静かな川と
無人の駅

私はここが好きだった

振り返ると
線路の脇の木々の間に
荷物をおろす人影がちらちらと光る

いつも
いつもそうだけれど
穏やかな時間は長く続かない
ふいに
どさりと鈍い音がした
誰かが荷物を落としたのだろうか

ちがう

そこら中の空気が重くなる

「救急車を」
取り繕った声が不安をかきたてる

群がる人の間に私が見たのは
たくさんの手に押さえつけられた物体だった

「タオルを」
「わりばし」
「棒みたいなものは」

手と手と手の間に
手が見える
足？
頭

口だ、と思う

口に押し込まれるタオル

父だった

父をみんなが押さえつけている

「救急車は？」
「呼びました」

そうだ、救急車だ
私は道路に向かって駆け出す

静かな町の道路には
車1台通っていない
流れる川が、横たわる

静かに、静かに、横たわる

「あなたぁ！あなたぁ！」
母の叫ぶ声が、私の何もかもにつきささる

私は足元の石を拾った
道路に向かって投げつける
何度も拾って、投げた

やがて、サイレンの音

父は、現地の病院に3日いただけでもどってきた
原因不明
日射病だろうと誰もが言った

私、死ぬかもしれない
ふと、そんな思いがした
言いようのない不安が私をつかんではなそうとしない

これはずっとつづく
そんな気がした

この不安は、きっと私を殺すだろう

秋から冬
冬から春
「死ぬなよ」
彼の言葉をくりかえし、つぶやく

くりかえし
くりかえし

きおく

中3になると
当然のように、彼とは違うクラスになった

彼の教室は3階
私は4階

たまに、廊下ですれ違う
どきどきする
でも
言わない

「ねぇねぇ、美子ちゃん、大事件」
しーちゃんが私の肩をたたく
「事件？」
「吉田がね」
吉田は彼のことだけど
彼はいつも事件を起こすから
別に驚かない

自転車で学校に来たとか
校長室のジュースを飲んだとか

「さっき、授業中に廊下で」
「はいはい」
「平野がね」
「吉田じゃないの？」
「吉田が美子ちゃんを好きだって、叫んだらしい」

「ふうん」
「驚かないの？」
「なんで」
「いつも、驚かないねぇ」

彼が私を好きなことはわかっていた
私が彼を好きなのもわかっている
だから
どうしろっていうのよ

その年の夏は、近くの川にキャンプに行った
去年のことがあるから
遠出はやめようと伯父が言ったから

疲労と直射日光が原因
本当にそう？

「美子ちゃん！」
川の中で、いとこの由香が叫んでいる
「まっててて、ジュース飲み終わったら行くから」
ジュースの缶を振りながら答える
「あれ、良太は？」
「あそこ、おとうさんと魚釣り」
「釣れるの？こんなところで」
良太が、こちらに向かって走ってくる

「おとうさんが」

言い終わらないうちに母が走りだした
私も走り出す
いつもの不安がすぐ横にやってくる

父は、川の水に膝半分をつけるように倒れていた
「美子！手を押さえなさい！」
母に言われるまま、父の右腕を押さえた
ものすごい力で押し戻されそうになる
体重をかけて、腕を押さえ込んだ

真っ白な父の口から泡があふれる
なにも見ない目が人形のようだ
人が集まってくる

「救急車！」
誰かの叫ぶ声と
ひそひそ声
いったい、何がどうなっているの？

やがて、発作がおさまり
高いいびきをたてながら
眠り込んだ父を
救急車が運んで行く

帰り道、母の声は真剣だった
今度、会社で倒れでもしたら
会社にはいられないこと
そうなったときの生活のこと

悲しくなかった

ああ、やっぱり
そう思った

その夜
伯母に泣きつく母の声を聞いた
「あんな父親がいるのがわかったら
美子はどこへも、お嫁にいけない」

私は、１晩中その言葉を反すうした
ああ、やっぱり

夕焼け

2日して父はもどってきた
父のもどってきた晩
母が出て行った

医者に止められたアルコールを
父が飲もうとしたとき
母は泣きながら怒った

みんながこんなに心配しているのに
体に悪い事はしないでほしいと
たのんでいるのに
それでも
あなたはお酒をのむんですか
それをのむなら
私は出て行きます

父はのんだ
母は出て行った

次の朝
父は何事もなかったように
会社に行き
私は、塾の夏季講習に行った

普通に友達と会い
普通に授業を受ける
夕食を作っていると

父はいつもの時間に帰ってきた
料理をテーブルに運んでいると
父はグラスを取り出し
ウイスキーをなみなみついだ

「おとうさん！」
父の方に駆け寄る
「どうして？なんのためにお母さんは出て行ったの？
やめてよ！」
それでも、かまわずグラスを口元にもっていこうとする父
「それをのんだら、私、もう何も食べないから！」
ゆっくりと
あおるようにのむ父

次の日
電話をかけてきた母に
弟は言った
「おねえちゃん、何も食べてないよ」
あわてて帰って来た母は
もう、なにも言わなかった
父も黙ってグラスをかたむける

思う
母が出て行くと言っても
私が食べないと言っても
のむのをやめない父
あの人は
あの瞬間
母を捨て
私を捨てた

新学期が始まる
目の隅で彼を探す
彼を探してどうするの
私は誰も好きになってはいけないのに

新学期が始まって1週間経っても
彼の姿は見えなかった
「ねぇ、吉田がケンカした話知ってる？」
「ケンカ？」
「うん、休み時間に誰かと、それで、学校に来れないんだって」
「ケンカなんて、しょっちゅうじゃない。なんで1週間も
来れないのよ」
「さあ？」
何かあったんだ、と思う
家の方で

彼が再び姿を見せたのは
9月の半ばを過ぎてからだった

放課後
夕日のあふれる道で
彼の後姿を見つけた
追いかけて、話をしたかったのに
追いかけなかった

私は人を好きになってはいけない
私は人を救えない

不安が私をはなしてくれない

刹那

時計を見る
煙草に火をつける
ガラス張りのエレベーターが
ゆっくりと登って行くのを眺めながら
新ちゃんが足を組みかえる

しんちゃんはいつまで待つ気かしら

しんちゃんは、待ち合わせに遅れても
絶対に怒らない
私は、いつも、わざと遅れていく

３０分か、１時間

「なにしてるのよ、しんちゃん」
そっと近づいて
後ろから声をかける

「いつまで待つ気？」
「悪い？」
「悪い」
しんちゃんをおいて、さっさと歩き出す

「いつだったか、美子が珍しく
遅れて来なかったことがあるだろ？」
「私が遅れなかった時じゃなくて
しんちゃんが遅れた時でしょ」

エレベーターの扉が開く
ヒールが軽い音をたてる
香りがする
しんちゃんの使う香りは甘い

ガラス越しに夜の街
ピアノがうたう

「あのとき」
としんちゃんが言う
「どうして、遅れてこなかったんだ？」

しんちゃんが
私に選ぶカクテルは
どうして
みんな
赤いのだろう

「しんちゃんは」
と私が言う
「私を、好きじゃないわ」

しんちゃんの香りが近づく
甘い香り
唇がそっと
私に触れる

「これでも？」

「それでも」

しんちゃんが笑う

「遅れたことなんて、ないわ」
いつも

しんちゃんが笑う
しんちゃんは何もわかっていない

遅れたことなんてない
でも
信じなくていい

いつも
いつも
本当は

待っているのは
私の方だと

言ったら
私は立てなくなる

「ほんとに、強いよな」
「強い？」
「酒」
「普通でしょ」

違う

と
しんちゃんが言う
顔色ひとつ変えないで
強い酒を
いくらでも

「注文してるのは、しんちゃんだわ」
「薄めたのはまずいって、いったからさ」

それから
と
しんちゃんが言う

のむと、よく、笑う
と

私は笑う

ピアノが
まるで
寄せる波の
こんぺいとうを砕いた波の
白のように
うたう

「私ね」
死のうとしたことがあるのよ

夜

しんちゃんが、グラスを指ではじく
怒ってる

しんちゃんが怒ると
ほっとする

私は、人を怒らせるのが好きだ
心の底まで、怒らせれば
その下はない

「美子は、不幸が好きなんだわ」
昔、りかちゃんが言った
そうそう
不幸は、私を裏切らない
そして
幸福は、私を不安にさせる

黙っているしんちゃんを横に
私は、窓の外を眺める
最上階のラウンジは
街のあかりが痛い

私は
どこまで行けばいいのだろう

「美子は」
しんちゃんが片手をあげて

お店の人に何かささやく
しんちゃんが自分に選ぶお酒は
どうして色が
ないのだろう

「俺が好きじゃない」

「そうなの？」
と私が答える

しんちゃんが笑う
「自分のことだろ？」

「怒ってるからよ」
「誰が」
「しんちゃん」

「怒ってないよ」
「怒ってる」
「つづきは？」
「怒るから話さない」
「もう、怒ってない」

「やっぱり、怒ってるんじゃない」
「話す気ないだろ？」
「ないわ」

しんちゃんのため息
私は、笑う

笑う度に、長い髪の先がゆらゆらする

目の前に置かれた
グラスの中のルビーの色

「しんちゃんは、赤が好きなの？」
「美子が好きだよ」
「私は、白のほうがいいわ」
しんちゃんのグラスをとりあげる

「マティーニ」

しんちゃんが煙草を消して立ち上がる
散歩でも？

よる

ビルの間をぬけながら
しんちゃんがそっと私の手をとる
「なんて、冷たい手をしてるんだ」
私は、その手をふりはらう

「手をつなぐのは嫌いだわ」

私の手は相手を冷やす
人を冷やすのは
せつない

「どうして」
「しんちゃんが転んだら、私まで転んでしまうからよ」

冬だ
と、思う
自分でも、ぞっとするほど
凍えた指先が
そっと顔を寄せるしんちゃんの
前髪をはらう

私の手を
しんちゃんがつかもうとするのを
ふりはらう

「でもさ」
と、しんちゃん

「美子が転んだら、助けてあげられる」
「自分で転んだ時は」
と、私
「自分で、立ち上がるわ」
「で」
笑いながら、しんちゃんが言う
「つづきは？」
「根気があるのね」
「珍しく、自分の話をしようとしたからさ」
「冬だったの」
いつも、漠然と死にたかった
かき消すように、消えたかった
「でも」
なかなか死なない
死にたい
死にたい
と、唱えているうちは
死ぬ気などない
あの頃の私は
自分がつくりだす不安をもてあましていた
良いか悪いかしかなかった私の世界で

どちらでもない事実は痛かった

「たとえば」

憎いのに、愛してる

ある春

高2の春
学校から帰ると、そのまま2階へあがる
ドアを開けると
誰もいないはずなのに
人の気配がした

ベランダに
父がいる

「お父さん」

「おかしいな・・」
首をかしげる父の目に
私は映らない
「お父さん、会社は?」
「たしか・・ここに・・」

私は強引に父の手をひいて
部屋に引き込む

ベランダのほうを振り返りながら
「シャワーがない」
と父が言う

私は、部屋の真ん中にうずくまる父を
物のように見下ろす
酔っている父に何を言ってもむだなのは

もう、わかっていた
たとえようのない感情がこみあげる
わかっている
苦しいのは

器用でなんでもできる父は
人の分まで仕事を背負う
そして、なにも言わない
そんな父を尊敬すると
父の友人は口をそろえる

でも
逃げてる

だって

こんなふうに、ときどき
会社に行かれない日があるじゃない

不安が私を笑う
ほら、まただわ

町で父を見かけても
声をかけてはいけないと
母が言った

「きっと、酔ってるから」
それが父だと人にわからないように

うずくまる父に話しかける
声にならない声

あなたは
なにが
したいのですか

あなたは
なにが
不満なのですか

あなたにとって
私たちは
なんなのですか

私は父が憎かった

そして

「いやか？」
ふいに父が顔をあげる

「いやか？」

いやかって？
いやにきまってるじゃない

私の声は父には届かない
日差しがやわらかな午後なのに

部屋には光があふれているのに

どうしてこんなに
不安なのだろう

雪

どこからか
なつかしい歌がきこえる

「まだ、話すの？」
私はしんちゃんを見上げる

「まだって」
なにも話してないだろ

「そうだった？」

返事のかわりに
しんちゃんが
ライターを
かちかちと
開けたり閉じたり

「その」
誰か綺麗な人にもらったライターを
捨てたら話すわ

しんちゃんが
ライターを放り投げる

ため息をついて
それを拾いに行きながら
私は

髪に
しんちゃんの香りが
移っているのに気付く

「結局、なんだかんだ言ってもね」
拾ったライターをしんちゃんに渡しながら言う

どうにもならないときは
死ぬこともできないのよ

「冬だったの」
なんの脈絡もなく
死のうかな
って
思ったの

ずっと
死にたいと
思っていたけど
その頃には
そんなことも
どうでもいいかなって時で
事件らしい事件もなくて
どちらかというと
平和な時

なのに
ふと
死のうかなって
思ったのよ

しんちゃんが煙草に火をつける

学校の帰りに
反対方向のバスに乗ってね
ひとりで
なんとなく
海のほうにいこうかなって

「怒ってる？」
「怒ってるよ」
「ふうん」
「で？」
「まだ話すの？」

しんちゃんが笑うと
そこら中が甘くなる

「冬だったの」
真冬
バスで駅に向かっている途中
雪が降ってきちゃって
とにかく雪で
道路が大渋滞

「晴れていたら」
３０分位で着くのに
１時間以上かかっちゃって

バスの窓から

外を見て
寒そうだなって
海なんて行ったら
もっと
寒いだろうなって

「おわり」

「おわり？」
「そうよ」

「駅に着いて、そのまま電車で家に帰ったの」
「寒いから、死ななかったんだ」
「雪が降ったからよ」

「美子」
「なあに」

俺の前で、他の男とキスするなよ

私が、笑う

寒かったからね

絵

冬なのにやわらかな日
散歩の途中なのに
話の途中なのに
しんちゃんが、タクシーを止める

「まだ、歩けるわ」
しんちゃんの袖をつかむ
しんちゃんのもう片方の手が
私の口をおさえる

車が動き出してしばらくしても
私は口をきかない

「ご機嫌ななめだな」

私は
しんちゃんが
私の靴擦れに気づいたのを
知っている

「しゃべるなって言ったわ」
「言ってないよ」
「どこに行くの？」
「美術館」
「行ったばかりだわ」
「いつ」
「昨日」

「だれと？」
「ひとりに決まってるでしょ」

「ひとりで映画。ひとりで美術館」
「なあに、それ」
「いい女の条件」
「聞いた事ないわ」

しんちゃんは絵を描く
どこにいても
好きな絵があると
動かなくなる

だから
ふたりで見たって
ひとりと同じ

映画だって
と
思う

ストーリーに入ってしまうしんちゃんは
となりにいても
そばにはいない

「この画家は」
と
しんちゃん

「絵が描けなくなったとき」
ノートに数字をずっと書いていたんだって

「あら」
私と同じだわ

「同じ？」

「私もね」
何も書けなくなったとき
ノートに
あいうえお
って
ずっと書いてたの

ノートの端に
教科書の端に

日記帳に並んだ
あいうえお

不安は
私が勝手につくりだすもの

みんな
いつも優しかった

かわいい美子ちゃん
勉強のできる美子ちゃん

いつも冷静でなにがあっても驚かない
そんな私にあこがれると

なにもかも
持っていると？

声がする
いつもの

私は
なにも
持ってはいない

画家の
サインのかわりの
数列が

あいうえお
に変わる

「しんちゃん」
しんちゃんの手が
魔法のようにのびて
私の頭を抱き寄せる

甘い
甘い
香りがする

答え

答えがないと言う答えを
探して歩き出すとき
私はすべてを捨ててしまう

少しばかりの人生の結論は
愛し方には様々なかたちがある
ということ

もしも
その愛し方では
相手が壊れるのなら
愛し方をかえればいい

それは
その人が人生の中で
限りなく重いと
残したいと
感じる場合に限るけれど

それはいつなのか
思いの残る別れはいくつかあるけど
いったい
何が違うのか

問われる度に
笑って答えないのは
それを決めるのは

理屈ではないと
その時は
迷わないものだと
言いたくないから

名前を呼ばれるのは嫌いだった
それが私だと決まってしまうから

相手の気持ちの矛先は
いつも
あいまいにしておきたい

相手の視線の先に
私があるのは痛い

私にもわからない私が
相手に
何を見せるのか

それは
途方もない嘘だと
思うから

桜

「しんちゃん」
私は
私の声が
やわらかいのに気付く
「大好きよ」

しんちゃんの背中を
そっと抱くと
しんちゃんが
その腕をほどいた

春が
桜が
甘く
狂う

「美子は」
「私は？」
「別れる男に、好きだって言ってどうするんだよ」
「だって、好きなんだもの」

「だったらどうして」

「どうしても」

しんちゃんが私の手首をつかむ

「はなして」
「はなさない」

はなさない？

それが
あいしてる
に
きこえるから

私は
しんちゃんのそばにはいられない

「こんなに」
あいしてるのに？

「痛い」
しんちゃんの手がゆるむ瞬間
ふりはらう

手首についた
しんちゃんの手の跡を
ゆっくり眺めながら

なぜか笑ってしまう

「桜が綺麗よ」

しんちゃんが
見上げる桜は

しんちゃんに優しいかしら
「さびしいのよ」
「そばにいるだろ？」
「いないわ」
「いる」
「だって、家に帰るじゃない」
しんちゃんが何かを言おうとする
私は言わせない
「ずっとなんてない」
学校に行くじゃない
卒業したら会社に行く
友達にも会いに行くでしょ
絵を描くとき、私を思う？
仕事しながら私のことを考える？
何十年も私を好きでいる？
ほかの誰も好きにならない？
まばたきもせずに
ずっとずっと
私だけを見ていられる？

いやなのよ

ずっとなんてない

永遠じゃないものなんて
いらないのよ

しんちゃんの手が
私の頬に触れる

甘い香りが
温度が
私を抱きしめた

海

たとえば
何年か後のこと

車の窓から海が見える

見下ろす街の明かりが昔より少ないと
となりから静かな声がする

届きそうなとき
つかめそうなとき
その寸前ですべてを切ろうとしたあの頃は

得ることで
なくすことが
辛かった

未来の私が
今の私が得たものを
なくすことで悲しむのなら
最初から
なにも望まない

そう
思っていたけれど

何年も

時間が通り過ぎてみると
予想した未来であるはずもなく

先を読んで用意したものを
使うことなど
ほとんどない

先を思うなら
未来を思うなら
今を楽しむこと

しんちゃんが言った

人生は
桜か
雪か

そんなものだと

最期のときに
振り返り

桜のように
あるいは雪のように
音もなく散る時間の
夢のような光景に
まあまあだったと言いたいと

「街のあかりのそのむこうに海が見えます」
「なんだよそれ」
「解説」
「なんで」
「運転してると景色が見えないでしょ」
「見えるけど」
「いいの」
しんちゃんの手に
私の手を重ねる
「運転中ですが」
「いいの」
人が所詮他人でも
わかるはずがなくても
その時間時間の真実は
あなたの体温が本物であるように

ひとときを抱きしめて
感じていれば
やがて
静かな白が降る

いつの日か
あなたの見る
桜に
雪に
私のひとつがあればいい

「死ぬなよ」
秋の午後
太陽のぬるま湯が窓に残る教室で
彼が言った

むかしむかしの
その言葉に
やっと答えがだせる

大丈夫

私は
私を幸せにすることにしたから

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0732k/

悲しいひと

2010年10月28日04時29分発行